

CAMPING

キャンピング

121

2008/2-3

社団法人日本キャンプ協会

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内

tel.03-3469-0217 fax.03-3469-0504



回覧

持ち出し禁止

資料提供：

森のようちえん全国ネットワーク

回覧

特集 幼児とキャンプ

森がわしたちのようちえん

幼児キャンプとその将来

スキルのページ 幼児と遊ぶっておもしろい!!

アウトドア・ゲームのページ ジャンケンでアイスブレイク

こんなときどうする?「キャンプの広報」

エッセイ 木原 珠子さん(オープンウォータースイミングアドバイザー)

Photo : 「ダンボールの舟完成」 フォトコンテスト出展作品



NCAJ

National Camping Association of Japan

www.camping.or.jp

日本キャンプ協会は「早ね早おき朝ごはん」運動に協力しています。<http://www.hayanehayaoki.jp/>



森がわしたちのよう

小菅 江美 Kosuge emi

上越教育大学非常勤講師・国際アウトドア専門学校講師

「きょうは、どこにいこうか？」

子どもたちとの一日が森の中ではじまります。私たちのようちえん(*注)は、森の中。森の中へおうちの人に送ってもらい、子どもたちが集まります。園舎をもたず、一年中、一日中、森で過ごす“森のようちえん”です。

*注 NPO法人の一事業として行なっている認可外の野外保育



毎日森を歩いているので、子どもたちは、ほとんどの歩くコースを知っています。どこにどんなおもしろいものがあるか、危ないことがあるか、毎日の継続の中でからだで覚えています。雨の日も雪の日も森を歩くので、空を見上げ、天気と相談しながら、「あめがふってきそうだから、木の多いお山コースにしようよ。」「はれてるから、牧草地からおうちをながめたいねー」などと、子どもたち

今月の表紙



「ダンボールの舟完成」

撮影者
今井 健志さん
(愛媛県キャンプ協会)

3枚のダンボール紙を使って舟を完成。近くの池まで移動中です。浮かぶといいね。

フォト
コンテスト
開催中!!

毎号、表紙写真としてノミネートされ、
年間最優秀写真を表彰します。
あなたもご応募を!

L判以上もしくは2000×
2000dpi以上のjpg形式
でお送り下さい

私は、毎朝通勤の途中、幼稚園の前を通ります。私や息子たちも通ったその小さな幼稚園の運動場では、朝早くからこどもたちの歓声でとても賑やかです。“今日は何して遊ぼうか”とみんなワクワクしているように見えます。家庭から外の世界に飛び出したこどもたちはとても好奇心旺盛で、いろんな新しい発見に目を輝かせています。

そんな感受性豊かな時期に、キャンプを通じて自然に触れ、新しい友達と出会う…。こどもたちは、乾いた砂漠が水を吸い込むように、いろんな経験をどんどん吸収していくような気がします。

今回の特集は「幼児とキャンプ」です。こどもたちは、キャンプを通じてどんな表情を見せてくれるのでしょうか。また、スタッフはどう考え、どう接しているのでしょうか。ページをめくると、そこにはいきいきと輝いているこどもたちの姿が見えてくることでしょう。

(吉松誠一郎)

ちえん



こすげえみ

1971年生まれ、新潟県在住。上越教育大学非常勤講師・国際アウトドア専門学校講師。6年の小学校講師時代を経て、環境教育事務所Lifetime主宰・特定非営利活動法人「緑とくらしの学校」理事長を務める。2004年の1月にデンマーク・スウェーデンの森の幼稚園を視察。日本に持ち帰り、森のようちえん「てくてく」を展開中。森のようちえんは、5年目になり、野外幼児教育を全国に広めたいと活動中。
<http://www10.ocn.ne.jp/~lifetime/> <http://green-life.cocolog-nifty.com/>

は、子どもたちの力を信じることです。

そして興味や好奇心を大切に、子どもたちのやってみたいことへの挑戦はできるだけ見守ります。できるだけ必要以上の大人の力を貸しません。自分で登った木は自分で降りることができるけれど、人に登らせてもらった木からは自分で降りることはできないからです。

太陽、土、水、木、火とふれること

最近の子どもたちは紙おむつで育ちます。紙おむつが快適になればなるほど、子どもたちの感じるセンサー、そして「気持ちわるい」と泣き叫ぶ力が衰えていくように、現代の暮らしの中で隠れてしまっている子どもたちの力があるのではないでしょうか。太陽の暑さと暖かさ、水の大切さと怖さ、火のぬくもりと危なさ。これは、本物にふれないと感じることはできません。自然の中には、危ないこと、快適でないこと、不便なことがあります。幼児期に自然と寄り添う時間を過ごしながら、子どもたちのセンサーはどんどん研ぎ澄まされていくのです。それは、自然の力によって子ども自身の備え持っている力が働きはじめると感じます。

この木のトンネルをくぐると子どもたちの時間があります。その時間に寄り添う私たちはどんな力が求められるのか、共に育つことを忘れずに、子どもたちと森で育ち合っています。



は歩くコースを自分たちで決めます。でも、1学期は、一人ひとりが違うところに行きたくて、一時間近くもコースが決まらずケンカになったことも……。

コースが決まつたら、お散歩に出発。子どもたちが先頭を歩き、目的地へと進みます。おもしろいものがあれば立ち止まり、思い思いに道草をしながら進むお散歩は、プログラムのない時間です。そこで出会ったもの・出来事が子どもたちの森の時間を作っています。

さんぽから帰ると、みんなでお料理。包丁を持ち、マッチを持ち、手づくりした味噌を使って味噌汁を作ります。たくさん歩いたあとのご飯は、おいしい。自分たちで作ったご飯は楽しい。山で取れた野菜もおかずにいただき、大地のエネルギーも補給し、子どもたちは元気エネルギーが満タンに。さらに森で自由に遊んで、お迎えを待つという毎日を過ごしています。

森の子どもの時間

森の時間は、おもちゃも遊具もない森の中でも、そこにあるもの全てが子どもたちの想像力によって楽しい遊び道具に変っていきます。幼児期の子どもたちは、何かになりきりお話の世界をつくることが大好きです。木の棒も、魔法のつえになったり、ほうきになったり。十分に想像の世界に浸ることができる時間とゆとり、そして大人は介入せずに子どもの世界を膨らませてあげることが、子どもたちの時間を豊かにするのです。

子どもたちの力を信じること

何度も転びながら、急な上り坂を登っている子どもたちに手を貸すことは簡単です。でも、自分の手で登りきったときの子どもたちの感動や達成感、そして自分の力と出会う場面を奪ってしまうこともあります。見守ること